

アートプロジェクトによる地域密着型の教育実践とその効果

「瀬戸内国際芸術祭 2016 沙弥島アートプロジェクト」を通して

THE COMMUNITY-BASED EDUCATIONAL PRACTICE BY ART PROJECT AND ITS
EDUCATIONAL EFFECTS

Through the 'Setouchi Triennale 2016 Shamijima Art Project'

戸矢崎 満雄	芸術工学部アート・クラフト学科 教授
藤山 哲朗	芸術工学部環境デザイン学科 教授
かわい ひろゆき	芸術工学部ビジュアルデザイン学科 教授
しりあがり 寿	芸術工学部まんが表現学科 教授
さくま はな	芸術工学部アート・クラフト学科 助教
中山 玲佳	芸術工学部アート・クラフト学科 助教
市野 元和	芸術工学部アート・クラフト学科 教授

Mitsuo TOYAZAKI	Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Professor
Tetsuro FUJIYAMA	Department of Environmental Design, School of Arts and Design, Professor
Hiroyuki KAWAI	Department of Visual Design, School of Arts and Design, Professor
Kotobuki SHIRIAGARI	Department of Manga Media, School of Arts and Design, Professor
Hana SAKUMA	Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Assistant Professor
Reika NAKAYAMA	Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Assistant Professor
Motokazu ICHINO	Department of Arts and Crafts, School of Arts and Design, Professor

要旨

アートプロジェクトとして本研究の一環として行うワークショップ、アートイベントなどを介して、芸術系大学教育における地域密着型のアートプロジェクトを持続的に行うことの教育的意義とその効果について知見を得ることを目的とした研究を報告する。

本学では「瀬戸内国際芸術祭 2013」に「沙弥島アートプロジェクト」として参加し、続いて「瀬戸内国際芸術祭 2016」に向けて現地調査、ワークショップ運営など実践的な研究活動を行いながら、作品制作や様々な方法で芸術祭の春会期に参加した。

沙弥島アートプロジェクトのテーマを「三つの赤」とし、6点の新たな作品を現地制作した他、多くのワークショップなどを行った。同時に、授業として取り組んだ学生主体のワークショップなどによる制作も学内などで行われた。イベントやアート作品の制作は、会場のある坂出市と沙弥島の地域の特徴や歴史を基にしている。

本学学部生と大学院生が授業の形式やボランティアスタッフとして参加した「沙弥島アートプロジェクト」は、地域に住む方々と共同して研究と制作を進め、学生に多くの貴重な体験的学習をもたらした。

Summary

In this paper, we would like to report some findings regarding the educational significance and its positive effects of the sustainable engagement with community-based projects at art & design universities by assessing our own art events and workshops as a part of this research.

As Shamijima Art Project, our KDU team participated in Setouchi Triennale 2013 and 2016 (Spring slot) which involved the presentation of our own artworks and some other activities such as field work and workshops prior to the triennale.

This year's Shamijima Art Project theme was 'Three Shades of Red' and six bodies of work were created on the spot as well as numerous related workshops and events. In addition, some student-led collaborative works were also produced as a part of the department's classes. All these artworks and related events mentioned here were created based on the region and its history of Shamijima (Sakaide city).

Both graduate and undergraduate students participated in some of these activities in collaboration with the locals, which brought them an engaging learning experience.

1. 研究の背景および目的

「瀬戸内国際芸術祭」に代表されるようなアートを主軸とした地域活性化プロジェクトは、今や社会現象となっている。本学でも「瀬戸内国際芸術祭 2013」に大学として参加した後に、坂出市と提携を結び、関係を継続的なものとした。地域社会としては過疎化が進む島々の問題があり、芸術系の大学としては社会体験を伴う教育的な効果を期待できるものとして相互の関係は得難いものだ。2013年には「沙弥島アートプロジェクト」^{注1)}として、教員だけでなく学部生と大学院生が授業の形式やボランティアスタッフとして参加した。本研究では、地域に住む方々と共同して研究と制作を進めること、そして学生に多くの体験的な学習効果をもたらすスタディーにすることを目的とした。

2. 芸術祭に向けての調査と準備

2013年「沙弥島アートプロジェクト」では、地域の伝統的な名産物「讃岐三白」からテーマを「三つの白」とした。そこからの継続的な意味もあり、2016年のテーマを「三つの赤」と定めた。

「三つの赤」とは、坂出市が掲げる特産物「金時人参」「金時芋」「金時みかん」に由来する。テーマを決定する前に、三つの赤い特産物について2014年12月に最初の調査を行っている。坂出市内での金時人参栽培地と坂出市園芸センター集荷所で金時みかんの選別作業を見学した。同時に、現地識者に金時人参の特徴や栽培時期などについてレクチャーを受けた。



図1 金時人参の栽培地で (坂出市)



図2 金時みかんの選別 (坂出市)

2015年2月には、メイン会場となる旧沙弥小中学校の施設を改めて確認し、環境などの整備を検討した。3月には、瀬戸内国際芸術祭の事務局がある高松において、総合ディレクター北川フラム氏に作品提案を行った。そこには坂出市の綾市長も同席している。北川氏からは、テーマ設定や作品内容について厳しい意見も出された。本学からのアーティスト6名(教員)についてはそこで決定し、作品内容については十分に検討することが求められた。4月には、「瀬戸内国際坂出市実行委員会総会」に参席して、本学「沙弥島アートプロジェクト」の企画提案を行っている。

3. 三つのワークショップ(WS)による制作

金時人参を素材に選んだ作品では、地元農家の田中さんの協力を得て、種植えから栽培、そして収穫後にピクルス作りまでをWSで行った。本学授業「大学院総合プロジェクト」^{注2)}では、受講生2名が主体となりWSをサポートした。2015年8月「金時にんじん種植えWS」、9月「金時にんじん間引きWS」、参加者は地元親子の方々だった。プロジェクトでは、成果物としてオリジナルデザインの「赤い手ぬぐい」を制作し参加者に配った。また、スタッフ用のオリジナルTシャツを学部の「学科横断プログラム」^{注3)}で制作した。翌年1月「金時にんじん収穫WS」、2月「金時にんじんピクルス制作WS」で作品完成へとつなげて行った。



図3 種植えWS (坂出市)



図4 ピクルス制作WS (沙弥島)

「島を描く」ことをテーマとした作品では、子供と親と一緒に、それぞれが思う島を描き、1枚の大きな絵画をつくりあげた。2015年11月、「行ってみよう!ぼくのしま、わたしのしま」と題して島を身近に感じながら生活している人々に“自分の想像上の島”を描くWSを行った。島は黒い紙に描き、それを切り取り拡大投影することで、イメージを膨らませた。12月には「描こう!ぼくのしま、わたしのしま」として、事前に作家が海をイメージして描いた青と白のストライプの上に島々を配置し、その上に改めてそれぞれが思い思いのイメージを塗り重ねた。



図5 島を紙で描くWS (沙弥島)



図6 島を布に描くWS (沙弥島)

沙弥島ナカンダ浜には縄文から弥生の土器の破片が散在する。土器を焼く真っ赤な炎も「赤」に通ずるものと考え、アート作品とは別に、イベントとして「土器の野焼き」^{注4)}を計画した。2016年2月、坂出市の方々がバスをチャーターして本学工房での「てづくり土器WS」に参加し、思い思いの土偶・器をつくり、乾燥

を待ち、3月に沙弥島西ノ浜で野焼きを行った。WSでは、本学陶芸コースの学生たちがサポートした。また、野焼きによる作品は、会期中の旧沙弥小中学校会場カフェの棚に展示された。



図7 土器づくりWS (本学にて)



図8 野焼きWS (沙弥島)

4. 学生が行うプロジェクト

沙弥島アートプロジェクトではアート作品以外に様々な取り組みがある。その一つが「赤い鯉のぼり」で、坂出市の伝統である鯉のぼりを学生たちの発想で新たにデザインし、描いた柄をつなぐことで共同制作した。幟は会場の庭に掲げ、プロジェクトのシンボルとした。これは「美術教育演習Ⅰ」^{注5)}の課題として取り組んだもので、社会的目的を持ったプロジェクトを共同で行うというケース・スタディーとして価値のあるものとなった。



図9 赤い鯉のぼりWS (本学)



図10 赤い鯉のぼり (沙弥島)

他に、来場者用のパンフレットのために「絵画演習Ⅰ」^{注6)}の授業で想像の島を描き、それをもとに表紙をデザインした。「赤」をテーマにしたため、力強い赤が印象的で、同じイメージが旧小中学校会場入口の大型バナーとして来場者にわかりやすい看板の役割を果たした。会場のカフェでは、地域特有のメニューを提供したが、そのオリジナル食器を制作^{注4)}している。瀬戸内の海をイメージして、楽しめるデザインとなり好評であった。



図11 オリジナル食器 (会場カフェ)



図12 エプロン (会場カフェ)

プロジェクトでは、その他にもエリアマップ、スタッフユニフォーム、カフェ用エプロンなどを制作することで、芸術祭のプロジェクトとしての内容を充実させた。会期中には、トークイベ

ントとして「食文化を支える金時にんじん」をテーマに、坂出市の6名の識者^{注7)}を迎えてのパネルディスカッションを旧沙弥小中学校前の海の家にて行った。



図13 マップとパンフレット



図14 トークイベント (撮影: 旦昌弘)

5. 六つのアート作品

5-1. 中山玲佳『Las Islas -しま・しま-』

島を身近に感じている人々に、想像の島をWSで描いてもらい、青と赤の海を模したストライプの中に、みんなの島を描くことで庭の壁面を飾る一枚の巨大な絵を完成させた。



図15 Las Islas -しま・しま- (撮影: 大崎俊典)

5-2. さくまはな『完熟の唄、海原に浮かぶ瀬戸の太陽』

地元名産である金時みかんは海面からの反射光で甘さを増すといわれる。その果樹を使い、紙に漁業網をイメージした模様をあぶり出したし、教室を暗室にして展示した。



図16 完熟の唄、海原に浮かぶ瀬戸の太陽 (撮影: 旦昌弘)

5-3. かわいひろゆき『ハレの日、金時への道』

WSで地元の親子と共同で育てた金時人参を瓶詰めしてピクルスを制作した。会場の教室に大量の塩を入れて畑を再現し、瓶を配置したインスタレーション作品。



図17 ハレの日、金時への道 (撮影: 旦昌弘)

5-4. 戸矢崎満雄『空飛ぶ赤いボタン』

不要になった赤いボタンを地域から集め、全体がハート形をした空飛ぶ絨毯のように、数千個の赤いボタンを一個ずつ天井から吊り空間に浮かべたインスタレーションによる作品。



図18 空飛ぶ赤いボタン (撮影: 大崎俊典)

5-5. しりあがり寿『赤いネジ』

力を表す巨大な複数のネジが、回転台を使い教室の床や机に食い込むように回り続ける。使われない学校に残された遺物なども使ったインスタレーションによる作品。



図19 赤いネジ (撮影: 旦昌弘)

5-6. 藤山哲朗『赤い窓の回廊』

風景や陽光を切り取る窓や扉をモチーフとして、現代の工業製品を使い、瀬戸内の多彩な光と影を演出する立体作品。旧小中学校会場から少し離れたナカダ浜に設置した。

6. 研究成果について

芸術祭には多くの人々が関わり、特に世界からも注目される「瀬戸内国際芸術祭」ではボランティアが大きな役割を背負っている。



図20 赤い窓の回廊 (撮影: 大崎俊典)

その中で、大学でも教育的見地から、人々の関心が高いアートイベントに参加できることは、学生もモチベーションの持続もできるために大変に魅力的である。地元の香川県出身の学生も本学に少なからずいて積極的に協力を希望していた。授業としての取り組みや、個人でのボランティアを含めて、様々なアイデアの活かし方や具体的な制作とその効果を体験できるものとして有効な場であると改めて確認できた。ただし、一定の方法論があるわけではなく、WSを含めて、その都度にデリケートな対応を心がけないと有効に結果を出すのは困難である。しかしながら、学生として、教員として、授業の取り組みとして多くの収穫と反響があったことをここに報告する。

注

- 1) 佐久間華・戸矢崎満雄・藤本修三・藤山哲朗・林健太郎・大畑幸恵、「瀬戸内国際芸術祭2013 沙弥島アートプロジェクト by 神戸芸術工科大学」、『神戸芸術工科大学紀要「芸術工学2013」』、2013年参照
- 2) 領域をまたがる複数の教員が担当し、チームを組み学外のフィールドワークなどを行う。このテーマの指導教員は戸矢崎満雄、かづいひろゆき、藤山哲朗、さくまはな。
- 3) 学科を超えて、さまざまなテーマにプロジェクトやワークショップで取り組む授業。「沙弥島アートプロジェクト・サポートワーク」をテーマとした指導は藤山哲朗、さくまはな。
- 4) イベントとしての「土器の野焼き」「手づくり土器WS」とカフェ用のオリジナル食器制作は全て市野元和が担当した。
- 5) アート・クラフト学科美術教育コース2年後期の授業で、この課題担当はさくまはな。
- 6) アート・クラフト学科2年後期の授業で絵画の基礎を実習で学ぶ。担当は中山玲佳。
- 7) パネラーは坂賀憲次(坂出市観光協会事務局長)、明石正子(坂出市婦人団体連絡協議会会長)、佐野伊勢子(同書記)、朝日奈好子(同会計)、田中孝敬(農業者)、中村承禎(坂出市産業係長)。